

【エントリー情報】

自治体名：札幌市

学校名（自治体でエントリーされる場合は記載不要です）：山鼻小学校

ご記入者：守屋洋佑

【設問】

① 貴自治体・貴校で目指している目標（ビジョン）・目標に至った背景・想いを教えてください。（1,500文字以内）※可能な限り自治体や学校全体の目標をご記入ください。

令和元年度言語活動指導者養成研修に参加した際に、指導したことに対する学習評価について、学ぶことがあった。その際、自分が国語科「話し合う」において適切な評価ができていたのかを改めて考えることとなった。

話すこと聞くことの学習では、

話し合いの進め方の検討、考えの形成、共有（話し合うこと）

第1学年及び第2学年

オ) 互いの話に関心を持ち、相手の発言を受けて話をつなぐこと。

第3学年及び第4学年

オ) 目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめること

第5学年及び第6学年

オ) 互いの立場や意図を明確にしながらか計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすること。※1を子どもたちは学ぶこととなっている。

※1 【国語編】小学校学習指導要領（平成29年告示）解説（mext.go.jp）p.30

しかし、今までの話し合いの評価の仕方を顧みると、話し合いの様子をビデオで録画して見返したり、子どもたちに相互評価させたりしながら行ってきたが、果たしてそれで全ての評価を適切に行うことができていたのか危惧を抱いた。

また、3・4年生の段階では、言語活動として以下のような設定をすることとされている。

（下線部筆者）

ウ) 互いの考えを伝えるなどして、グループや学級全体で話し合う活動。

互いの考えを伝えるなどして話し合う言語活動を例示している。

話し合いには、結論を一つにまとめることに重点を置くものや、それぞれの参加者の考えを明確にしたり広げたりすることに重点を置くものなどがある。

多人数での話し合いは、少人数での話し合いに比べ、話し手と聞き手との間に一定の距離があるため、改まった言葉遣いをするなどの配慮が必要である。また、一人ひとりが発言する機会が少ないため、話し合いの進め方や司会の役割が重要となる。

このため、話し合いをする際には、児童一人ひとりが、司会などの様々な役割を経験できるようにすることが重要である。

話し合う言語活動は、他教科などにおいても取り入れられることが多いため、それらの活動との連携が求められる。※2

ここから、児童全員に均等に機会を与え、それに対しての評価をすることが求められているにもかかわらず、自分が単元内でできていたか、改めて考え直す必要があるのではないかと思いついた。

また、札幌市では、「学ぶ力」に関する「札幌の成果と課題」を踏まえた総合的な取り組みとして、「さっぽろっ子『学ぶ力』の育成プラン」を推進している。※3

その中で、学ぶ力の育成について次のように述べている。

「学ぶ力」の育成に向けた5つのポイントを活用するとともに、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図りながら、自ら疑問や課題をもち、主体的に解決する「課題探究的な学習」を取り入れた授業の工夫改善を図る。※4

また、札幌市では、課題探究的な学習の定義として、

「課題探究的な学習」を「自ら疑問や課題をもち、主体的に解決する学習」と定義するとともに、「札幌市課題探究的な学習推進方針」を策定し、その推進を図っています。※5と明記している。

※2 【国語編】 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説（mext.go.jp）p.100

※3 学ぶ力の育成/札幌市 https://www.city.sapporo.jp/kyoiku/sidou/manabu_tikara.html

※4 同上

※5 同上

今回、子どもの学ぶ力の育成では、この「自ら疑問や課題をもち、主体的に解決する学習」を子どもたちができるように、そして、指導と評価の改善に向けて、「話し合う」における端末の活用として、かねてからICTの活用が行われてきた「話し合いの仕方のお手本のビデオ」「話し合いの様子撮影」だけでなく、一人一台子どもたちに端末があるからこそできる活用、子どもたちの「学ぶ力」の育成。そして、子どもたちが学習したことに対する評価を的確にとらえ、さらなる指導改善ができればと考えた。

② 目標（ビジョン）に向けた具体的な個人のお取り組み・学校全体でのお取り組み、学校の枠を超えて市や他校へ広がったお取り組みや、その中で発生した課題や苦勞を教えてください。（1,500文字以内）

○見返したときに話し合いの経過がわかるようにしたい

「書くこと」の学習であれば、子どもたちは、自己の表現したものは、書いた文書として残すことができ、自己の変容を目に見える形で理解することができる。また、教師もそれを目で見て、その場で、そしてあとから評価することができる。

しかし、「話すこと聞くこと」の学習では、話したことが記録として残らず、子どもたちが互いに何を話したのか、どのような流れで結論をまとめられたのかという過程を、教師があとから見るのが難しかった。もちろん、ビデオで録画することはできたが、小グループの

話し合いを録画しようとするカメラが何台も必要となる。そのため、グループごとに分けて撮影し、話し合いをしていないグループは、モニターとして記録して、撮影したものと確認しながら話し合いのポイントを見返すことはできたが、時間がかかった。

前章で述べたように本来は、全員がやり方を理解するだけでなく、実際に全員が司会をしたり、記録をしたりとすべての役割を経験するべきではあるが難しかった。(そのため、国語以外の時間帯ではあるが、日常的に小グループで話し合いの時間を設け、全員が司会を経験できるようにしていた)

小グループの話し合いでは、自己の意見を述べ合い、ホワイトボードやアプリなどに意見を出し合ってまとめ、その書き出された共通点と相違点を見つけながら合意形成を図っていく。それをそのままデータとして残すことができれば、子どもたちは、話し合いの経過を理解し、よりよい話し合いの仕方を身につけることができるのではないかと考え、画面録画の取り組みを始めた。

○実践 4年生「対話の練習『あなたなら、どう言う』」光村図書

子どもたちは、前年度の学習の中で、

- ・『共通点と相違点』に着目して話し合いを行うと、話し合いがまとまる
 - ・意見がたくさん出てまとまらないときは、共通点に着目して話し合うことで妥協点が見いだせそう
 - ・意見があまり出ないときは、相違点に着目していくと意見が増えてきそう
- ということを学んでいる。

前年度との違いとして、今回子どもたちが挑戦したのは話し合いの話題と自分たちとの距離感である。前年度は「1年生への読み聞かせの本を選ぶ」という自分に利害があまりない話し合いであったが、今回は、自分に近い話し合いのテーマ「最近あったことをどのように解決すべきだったのか」を個々の題材で話し合った。

今回子どもたちの話し合いでは、話し合っている様子を子どもたちが見返す際に明確に理解できるように画面録画(スクリーンレコーディング)を使用することとした。画面録画の活用場面では、ムーブノートを使用し、子どもたちが話し合いをする際にカードで自己の意見をアップし、そこから司会がアップされたカードを共通点、相違点に着目して話し合いをまとめていくのである。

ムーブノートは、手を挙げて意見を話すということを省略し、意見があればカードを送ることができる。手を挙げて発表することも大切な要素ではあるが、今回は、「身近な話題でも共通点と相違点に着目して結論としてまとめること」を大切に、共通点と相違点に着目して話し合う時間を長くとれるようにした。



○ICT を活用した取り組みを広げる

私は、北海道国語教育連盟「話すこと聞くこと」部会のチーフをしているが、部会中で「どのような Chromebook の活用が効果的か」「指導事項につながっているか」を話し合うことが多い。その中で、今回の実践を発信するとともに、そこで得た知見を基にさらにより活用の仕方についても議論し、実践をしてムーブノートを使用した画面録画の有用性について広げている。

③ (3-1) ICT を活用することで、先生のご指導や働き方、児童・生徒の学び方や学習への態度、学習成果などにどのような変化があったか、またこれらの変化をどのように評価されているか教えてください。(2,000 文字以内)

1. 児童の学び方・学習への態度、学習成果

言語活動の設定は話し合いを活性化させるために大切ではあるが、話し合い方という面では、画面録画を活用して、全員が司会を経験することで、子どもたちは自己の話し合い方を主体的に見直すようになった。自ら問いをもち、解決しようとしていったのである。話し合いが時間内に終わらなかったとき、話し合いの合意形成に疑問点があったときなど、子どもたちは「どうして、自分が司会のときの話し合いは〇〇だったのだろうか？」と自ら動画を見直し、お手本の動画を見返したり、同じグループの仲間と話し合ったりして自分が司会をした際の話し合い方の課題と向き合っていた。

また、自分の課題を見つけるなかで同じグループの動画を見るだけでなく、ほかのグループの話し合いを見てよい話し合い方を見つけて自分たちの話し合いに生かそうとしていることが多く見られるようになった。その中で、見つけた話し合い方の「良いところ」をほかのグループに発信しようとしたり、全体に共有しようとしたりする姿勢も多く見られ、「個別

最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図りながら、自ら疑問や課題をもち、主体的に解決する」ことを子どもたちが教師の指示なしに進めていた点が子どもたちにとっての成果ではないかと考えている。

今までの学習の形態では、話し合いにおける共通点と相違点を見いだしづらかった児童もムーブノートのテキスト分析を活用することで、どのような言葉が多く出てきているかを考えながら学習を進めることができていた。ムーブノートのテキスト分析は、これまでは話し合いの際に、共通点を見いだせないままに話し合いを行うため進行できずに止まってしまっていた子どもを一步前に進めることができる素晴らしい機能である。この機能により、話し合いにおける司会が苦手な児童も以前のようにひと言も発言できずに時間が過ぎるのを待ったり、皆の意見を勘案しない話し合いをしたりするのではなく、言葉に着目した話し合いをすることができるようになった。



2. 教師の指導

子どもたちの中で、話し合いの成功の可否は、話し合いがまとまったかどうかである。もちろんそれは大切なことだが、教師側としては、指導事項につながる話し合いの方法を子どもたちに理解してほしいので、ズレが生じることもある。

そのため、今回は、グループごとに個の事案について話し合った際に、子どもたちが個々に「どうして？」と話し合いがうまくいかなかったときに、それを板書して全体に広げることがを心がけた。そして、その中で子どもたちの疑問を拾い上げ、共通の問いとして皆で考えていくことができるようにした。そうすることで、子どもたちは「私のグループのときは…」 「でも…」などと自然と話し合い方に目が向き、「話し合いがうまくいくためには…」と指導事項に直結するまとめ方に進むことができた。

3. 働き方について

子どもたちの学習したことを評価することが最も教師にとって大切なことであろう。「話すこと聞くこと」の学習では、記載されている内容について答えるテストや、音声を聞いてテストの内容に答えるということで評価をしているところもあると考えられる。

そのようなテストでは、子どもたちの本当の力が評価できないのではないかと考え、以前から子どもたちの様子をビデオで撮影し、評価するというを行っていた。このビデオでの評価は、28人学級でのグループの話し合いであれば4人×7グループとなり、1グループあたり1時間程度かかっていた。そして、7時間以上かかるにもかかわらず「誰が何を話しているのか」「どのように意見をまとめていったのか」がわかりにくいことが多かった。今回活用したムーブノートの画面録画は、カードに名前が記載されているため、画面上で誰がどのようなカードを送ったのかがわかるとともに、どのように話しながらカードを移動したり、まとめたりしたのかが見ている人にとってわかりやすい。また、話し合いの場所の設定も体育館で小グループの話し合いを行ったり、教室を分けたり、マイクつきイヤホンを活用したりすることでノイズを抑えることができた。

評価では、子どもたちが共通点と相違点に着目して話し合いができているかを確認するとともに、「司会者、提案者、参加者などは、それぞれの役割を理解し、話題に沿って発言しているか、その発言は話し合いの流れを踏まえているかなどの観点に基づいて適時判断しながら話し合いを進める」※6 ことができているかを見た。画面録画を活用し、一人当たり約10分の動画を2倍速で見ることで、クラス全体の評価を約2時間で行うことができたことは、これまでの話すこと聞くことの評価の在り方を考えると、大幅な時間の短縮であると考えられる。今までの評価の質を下げることなく改善するとともに、業務量を改善することができたことは、ほかの先生方にもお勧めできる実践であると考えている。

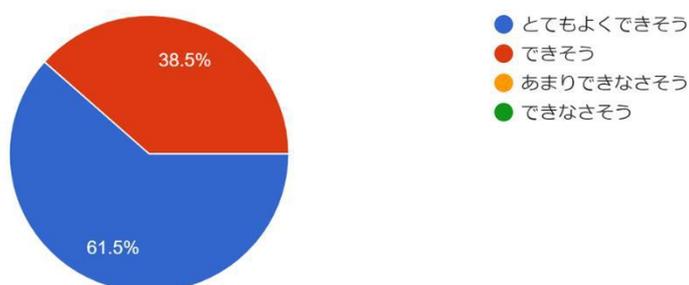
※6 【国語編】 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説（mext.go.jp）p.98-99

(3-2)ICT活用による成果について、定量的なデータでお示し可能なデータがあれば、教えてください。（1,500文字以内文字以内）※本設問のみ任意回答

今回の学習では、子どもたちには、フォームを活用した振り返りをアンケートで行うことで、今回の学習の効果について問うた。

今回学習したことで、言い争いを減らすことができそうですか？

26件の回答

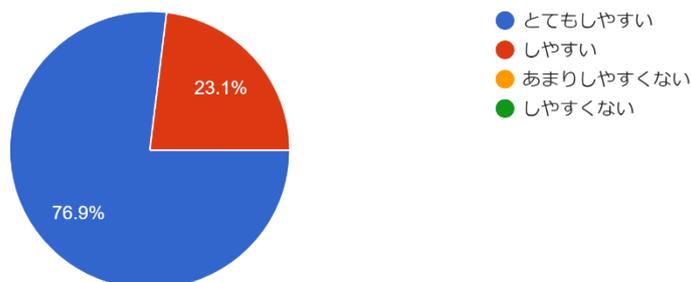


これは、指導事項と直接関係ないが、話し合いにおける満足感を子どもたちに問うたものである。教師は、話し合い活動について子どもたちに理解させたいが、子どもたちにおける話

し合いの成功は話し合いがまとまったかどうかである。子どもたちが学習を通して満足感や有用感が高まったという意味で、良い結果であったといえる。

今回、ムーブノートを使用して意見をまとめてい...し合いと比べて話し合いはしやすかったですか？

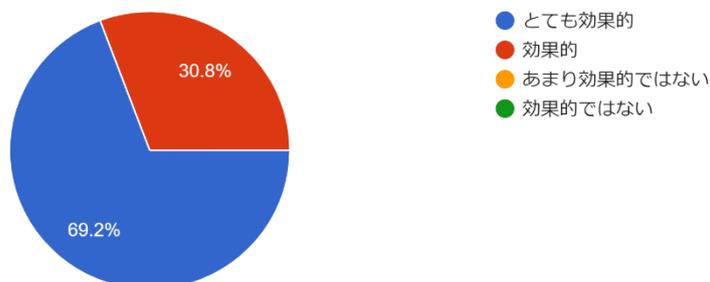
26件の回答



これは従来型のホワイトボードや黒板を使用した話し合いとムーブノートを活用した話し合いを比較したものである。最初に提示した学習の内容面の評価における「とてもしやすい」の割合が61.5%だったのに対し、76.9%と高くなっている。話し合いが苦手な児童も「とてもしやすい」を選択していたことからムーブノートの共通点に着目した集計機能が、話し合いの練習として役立つのではないかという可能性を示している。

今回、話し合いを画面録画機能を使用して見返す...が、話し合いの上達に効果はあると思いますか？

26件の回答



これは、話し合いにおける画面録画が子どもたちにとって、有益だったのかどうかを確かめるために問うたものである。約7割の児童が「とても効果的」を選択していた。2番目のアンケートともつながるが、話し合いの動画を見返す際に、ムーブノートが言葉に着目しやすい部分があったため動画に比べ、子どもたちの評価が高かった。

担任に対する^{そんたく}可能性もあるが、とても効果的を選択した人数が多いことを鑑みると、子どもたちにとって今回の実践は有用だったと言える。ぜひ、北海道外にもこの取り組みを広げ、日常や社会生活で使用する事が多い、話し合い活動の促進をしていただきたい。

④ お取り組みの中でのミライシードの活用画面・活用機能お取り組みの中でミライシードが役立った場面・活用頂いたアプリ/機能を教えてください。 ※活用エピソードが複数ございましたら、文字数制限内でご記入ください。1つのエピソードに絞る必要はございません。(2,000文字以内)

実践の応用①

今回の実践では、子どもたちがムーブノートを活用した画面録画を使用したが、よりよい活用があるのではないかと思い、新たに6年生で実践を応用した。

話すこと聞くことの学習では、お手本動画を見せることが多くある。それは、教科書の動画であったり、自作のものであったり、NHK for School だったりするだろう。応用した実践では、それをより、子どもたちが必要性をもって活用できるようにしたいと考えた。

6年生での学習で押さえるべきこととして、考えを広げたりまとめたりするとは、話し合いを通して様々な視点から検討し、自分の考えを広げたり、互いの意見の共通点や相違点、利点や問題点などをまとめたりすることである。話し合ったあとで考えをまとめる際には、異なる意見を自分の考えに生かせるように「～という意見もあったが」「～という考えもあるけれど」などの表現を用いられるようにすることが効果的である※7、とされている。

※7 【国語編】 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説（mext.go.jp） p.136

つまり、子どもたちは、相違点を受け止めながら合意形成を目指していかなければならないのである。しかし、6年生の現状を見るとなかなか相違点に着目することはできず、共通点のみに目を向けて話し合いを進めているように感じられた。子どもたちは、自分たちの話し合いがうまくいっていると感じているので、話し合い方に対して不足感をもっておらず、教師の話し合い方の動画を見る必要性を感じていない。

そのため、今回は、初めに教師から話し合い方の手本を示すのではなく、そのまま話し合いを進めるスタイルをとることとした。その中で、どうしても話し合いが難しいと思っているグループを教師側で選択し、そこに教師が入って司会として話し合いを行った。その際には画面録画を行い、グループの子どもたちの意見を共通点と相違点に分けるとともに、異なる意見を活用しながら「どのあたりに妥協点を見いだせるか」というところを「～という意見もあったが」、「～という考えもあるけれど」などの表現を用いながら見いだしていった。話し合いが終わった段階で、皆で話し合いがどのように進んだかを確認し合った。その中で、話し合いに満足感をもつグループ、不足感をもつグループに分かれたため、お互いに撮った画面録画を見せ合ったり、意見を言い合ったりした。そこである程度意見が出しきった状況で、教師と話し合いを進めたグループに意見を求めることで「あんなに話し合いができないと言っていたグループがなんでうまくいったんだろう？」と教師が司会をしたビデオを見たいという必要感を生むことができた。

このような流れ、そして用意されたものではなく、ライブ感を出すことで子どもたちは「やらされている」「ルールが引かれている」と感じることなく学習を進めることができたので、ぜひ「苦手なグループに教師が入って学習を進め画面録画をする」見本動画をほかの方々に

もお勧めしたい。

実践の応用②

話し合う活動は、国語の学習の中だけで行われるのではなく、日常の学習全てにつながってくる。学級の人数が41人の現在、なかなか単元のまとめの発表などをすることが時間的なものがあり難しい。個人の発表であればオクリンクでよいが、グループでの話し合い活動のまとめは、ムーブノートを使用したい。グループの話し合いでは、ムーブノートを使用し、皆で話し合った内容を何かにまとめるということを新たにするのは、手間がかかる。

そこで活用したいのは、ムーブノートにある広場の画面を切り取ってスライドを作ることができる機能である。一人が編集している間は、ほかの児童は画面を動かすことはできないが、その間も、どこを切り取ったらより伝わるか、どんな資料を足していったらよいかを話し合いながら進めることができる。

国語の授業としての「話すこと聞くこと」のコマ数は、他領域に比べて少ない。しかし、日常の授業の中で鍛えることができるものである。ぜひ、日常から話し合い活動の時間を設けて子どもたちが社会に出たときに活用できるようにしてほしい。

広場 私のノート 第2次世界大戦にならないためにこうすれば

第二次世界大戦

自分だったら長い戦争にならないようにどうする?

するために、大きく開発を進めてきたら、中国にまでは攻め込まない。満州国を守るだけにする。

自分だったら長い戦争にならないように: まずここでわさらい、世界恐慌は、世界が戦争に巻き込まれたもの。日本に与えた影響は生糸がアメリカにも買手がいない。日本は外国からの金が送られなくて貿易が激激な減りも受けて激激な減りが起る。戦いでをし、太平洋戦争勃発。太平洋戦争を始めて15年経たないためには満州を占領せず、満州に交渉したり、他を分けていく。世界恐慌を解決して行けば良かった人だけ。満州や中国を攻撃したことで一人が多を殺したら残らない人でも残る人でも関係ない。世界が激しくても攻撃するものは絶対無くなった。

班の結論

とにかく激しい戦争は絶対に起こさない。そこから、話し合いで解決して世界恐慌をしのぐか、満州国を開発するか、他の選択肢を取るかは人次第。仮にどこかに攻め込まれても、徹底的に防衛をする。

5/6